

日本放射線化学会誌 100 号記念

早稲田大学 理工学術院

鷲尾 方一



放射線化学会誌もとうとう 100 号を迎えることになった。一口に 100 号といっても、1 号 1 号編集担当者が心血を注いで原稿の依頼、とりまとめ編集をして戴いた成果であることを考えると、極めて大きなマイルストーンを踏んだことになる、心を新たにしている。

放射線化学会誌が初めて世に出たのが、1966 年 3 月 30 日だったので、それからほぼ 50 年を経過したことになる。その時の目次をみると概ね次のような内容になっている。

〈会長挨拶〉、〈学会の発足までの道のり〉説明、更に〈解説〉として、「放射線イオン重合機構」京都大学・岡村誠三先生、〈トピックス〉として「光化学における水和電子」原研・大野新一先生、「放射線を利用したポリエチレンフォーム」積水化学、「硫黄で加硫できる変性ポリエチレン」電通研・松尾博先生が並び、〈研究紹介〉で「原研高崎研究所」原研・後藤田正夫先生、「ノートルダム便り」志田忠正先生、〈会員のページ〉放射線化学会の前途を祝してという題目で、東工大・工藤令先生、阪大・広田鋼蔵先生、阪大産研・川西政治先生が筆を執られている。このほかに〈ニュース〉が 7 件記載されている。

こうやって見ると、全体の構成は当時と今でもほとんど変わらないことが分かるが、当時の会員数は正会員 158 名、学生会員 25 名、賛助会員 3 社と、既に多くの方々の参加を見ている。うっかりすると現状と大差ない状況を見るに、今の学会のもう一段の発展への展開策が必要と考えている。

さて、このような状況下で今の放射線化学会はどの

ようなことをしていけばよいのか、もう一度考えねばならない時期にあるといえそうである。放射線化学会の会員の多くは、放射線と物質の相互作用の極めて基礎的な部分について多くの研究を重ね、そこから知見を得て、反応機構の解明などを目指しているが、放射線化学の知識を総動員した新しい“もの創り”については、余り大きな貢献ができていないように思う。最近ではパルスラジオリシスの研究からレジスト反応の現実的な描像が示されるようになるなど、ある側面では大きな成果も挙げてきているが、学会誌の第 1 号にある、「ポリエチレンフォーム」のような製品製造に直接的に結びつくような成果はなかなか見ることができていない。「放射線化学の基礎的な知識が画期的な製品を直接創出するような例を数多く見てみたい」と思うのは筆者だけであろうか？ このような方向への具体的な挑戦を老若男女問わず、皆さんがしていただければと、強く思っている。このような挑戦へ向けて、今後の学会の運営に皆様のお力添えをいただければこれに勝る喜びはない。

本稿のおわりに、今後の学会誌の成り立ちを決めることになるであろう、100 号、101 号の編集に当たられる、編集委員諸氏の努力に会員が一致協力して、新しい放射線化学会の地平を拓いてもらいたいと考えている。

(2015 年夏記)

Memorial 100th Issue of Japanese Society of Radiation Chemistry

Masakazu WASHIO (Research Institute for Science and Engineering, Waseda University),

〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1

TEL: 03-5286-3893, FAX: 03-3205-0723,

E-mail: washiom@waseda.jp